



西ノ岡遺跡発掘調査報告書

1981・3

鳥取県八頭郡船岡町教育委員会

序

このたび、船岡町大字福井字西ノ岡地内に、町営新農業構造改善事業西ノ岡地区は場整備事業が計画実施されることになりました。この付近一帯は、埋蔵文化財の包蔵が予測される土地であります。

このため工事により埋蔵文化財が破壊される恐れもあるので、町文化財保護委員会の意見を聴取した結果、事前の予備調査が必要であると認め、昭和55年6月3日発掘調査に着手いたしました。

例年になく異状なまでの冷夏のためか、悪天候に悩まされ調査も困難でありましたが、初期の目的を達成し、多くの成果を挙げて無事に調査を終了いたしました。

これは、ひとえに県文化課文化財主事森田純一氏の適切なご指導・ご助言と、終始献身的に調査にたずさわっていただいた松下利秀主任調査員の両氏、並びに作業にご尽力いただいた町文化財保護委員を初め、地元関係者の方々に対して、厚くお礼申し上げます。

昭和56年3月20日

鳥取県八頭郡船岡町教育委員会教育長

西 尾 親 義

例　　言

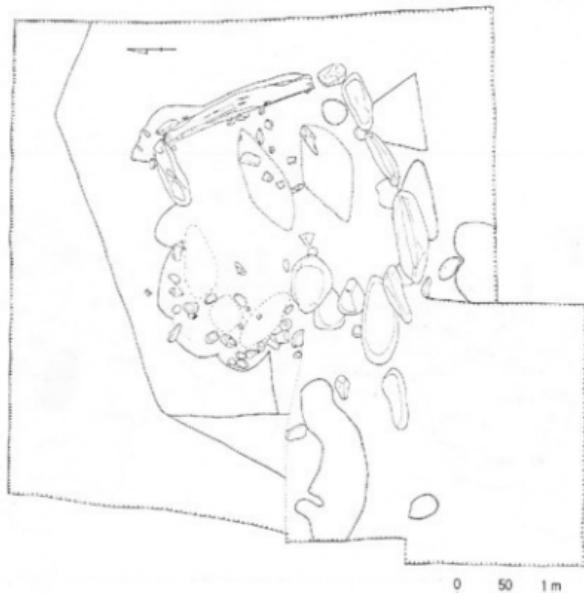
- この報告書は、町営新農業構造改善事業西ノ岡地区ほ場整備事業の実施に伴なって行なった埋蔵文化財発掘調査の記録である。
- 調査は、船岡町教育委員会が「西ノ岡遺跡発掘調査」として、国・県の補助を受け行なった。
- 期間は、昭和55年6月3日に着手し56年3月20日に終了した。
- 調査の実施にあたっては、遠宜県文化課の指導助言を得た。
- 本書の作成は、松下利秀が執筆編集した。
- トレンチ分布図については、町産業課作製の1/1,000地形図を使用した。
- 本書に使用した方位は全て磁北を示す。
- 遺物の保管は、船岡町教育委員会で行なっている。

調　　査　組　織

- (調査主体) 船岡町教育委員会
(調査団長) 西尾親義(船岡町教育委員会教育長)
(調査指導) 森田純一(鳥取県教育委員会文化課文化財主事)
(主任調査員) 松下利秀
(調査員) 中家誠次、木下俊雄、浦林寿男、田中登貴男、西尾政美(以上、船岡町文化財保護委員)、田中一男、橋本正太郎、谷口雅美智(以上、船岡町教育委員会)
(作業員) 岩見一郎、木嶋孝明、橋本信治、岩成康治、木下正人、井田春野、井田たつ子、木下すみ江、岸田美智子、浦林はる江、木嶋善美子、小橋和江、橋本和江、橋本道子、西田登喜子、田渕和子、山本正子
(事務担当) 竹尾雅詮(船岡町教育委員会社会教育主事)



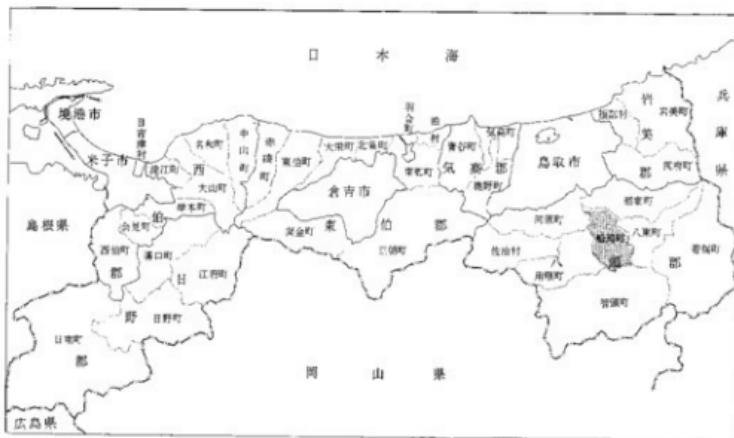
西ノ岡古墳の石室（南西より）



第1図 西ノ岡古墳平面図

目 次

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境	1
船岡町の遺跡と神社の分布図	2
西ノ岡遺跡トレンチの分布図	3
第Ⅱ章 調査の概要	4
1 A ₁ ・A ₂ トレンチ	4
2 Bトレンチ	6
3 C ₁ ・C ₂ トレンチ	8
4 D ₁ ・D ₂ ・D ₃ トレンチ	11
5 E ₁ ・E ₂ トレンチ	20
6 Fトレンチ	20
7 西ノ岡古墳	23
付録 西ノ岡遺跡遺物・遺構写真	31
あとがき	40



船岡位置図

第Ⅰ章 遺跡の位置と環境

八東川中流域左岸、千代川河口より約24kmの所にある西ノ岡遺跡は、新第三系中新統の鳥取層群下部層を基盤とする海拔高度70～80mの沖積扇状地に位置している。

この遺跡の下位には、遺跡との比高6～10mで中位段丘（約3万年前の洪積段丘）が华小学校付近から上野・下濃にかけて広がり、その下位の低位段丘との比高も3～6mあり、段丘面が比較的よく保存されている地域である。

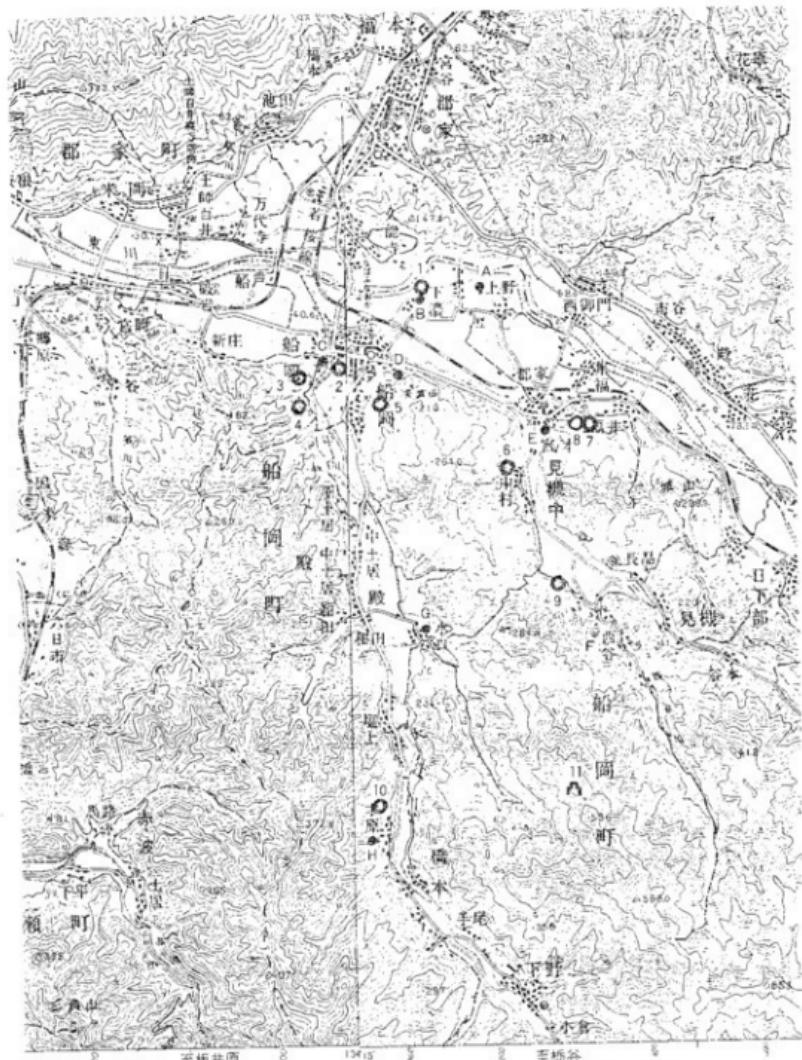
この遺跡から八東川への最短距離は約500mあり、下流へ約4kmの地点の私都川右岸には白鳳時代後期の創立と推定されている国指定史跡の土師百井庵寺^(註1)がある。そして岩永実（1959）^(註2)は旧八上郡内における方格地割を字名より推定しており、これを船岡町遺跡分布図に使用した5万分の1地形図で見ると、私都川流域では口繩手・三反田（花原）。漆ヶ坪（石川百井）。六反田・八反田（宮谷）^(註3)があり、八東川流域では石ヶ坪・柿ヶ坪（三谷）。梅ヶ坪（坂川）^(註4)（下濃）（西御門）。坪の内（殿）。石ガ坪・漆ガ坪（日下部）^(註5)とあり、地形的には低位氾濫原をさけ高位氾濫原乃至第ⅠⅡ段々丘上に見出されるとして、奈良時代にはこの付近一帯に条里が施行されていたと推定している。

また、今回の発掘に前後して調査した牧野遺跡、丸山遺跡では弥生時代中期の土器を検出しておおり丸山遺跡では中世の遺構・遺物も出土している。そして西ノ岡遺跡のC₂トレンチでは、奈良時代後半期と推定される円面鏡が出土している事により、この付近の主要な建造物があったとも考えられ、この地域一帯は早くから開けていたものと推定される。

西ノ岡遺跡の地形について見ると、基盤礫岩の上位をクロボク又はロームの二次堆積物が薄く被覆する沖積扇状地と判断され、部分的には第三紀丘陵と呼ぶべき所も見られる。

A・Dトレンチで土層断面を見ると、概略的に地表から基盤礫岩までの間に二層の明褐色土層が認められ、基盤礫岩を含めると三つの文化層として識別出来ると考えられる。下位のものから、弥生時代後期・古墳時代前期そして奈良時代に対比出来るのではないかと考える。またC₂トレンチの土層断面より奈良時代後半期以後室町時代までに2回の地形的に安定して土壤の層相分化の進行した時期があったものと推定される。つまり、A・Dトレンチでの二層の明褐色土層は沖積扇状地形成過程の中で、土石流堆積物が土壤化して行く過程での層相分化による集積層又はD層（基盤）に相当するものと判断され、C₂トレンチで見られる斑紋土層も同質のものと解釈すると、計5回の地形的に固定されていた時期を弥生時代以降に推定出来る。

西ノ岡遺跡で確認された遺構として弥生時代後期と奈良時代後半期の住居址そして古墳時代後期の古墳が挙げられるが、この事より牧野遺跡^(註6)と同様的印象を受ける。つまり弥生時代後期から古墳時代前期にかけてこの地区は住居区として使用され、古墳時代後期には聖域として墓地として使用され、奈良時代後半期には再度住居区として使用されていたものと推定される。この現象が地域一帯に共通するものであるならば、その原因を究明する必要が生じてくる。



①梨ノ木古墳

②下荒神古墳

③丸山遺跡

④神明古墳

⑤大平古墳

⑥栗坪古墳

⑦福井古墳

⑧西ノ岡遺跡

⑨牧野遺跡

⑩橋本遺跡

⑪平瀬城址

⑫上船岡神社

(A)野々宮神社

(B)下野神社

(C)下船岡神社

(D)上船岡神社

(E)隼神社 (F)水口神社

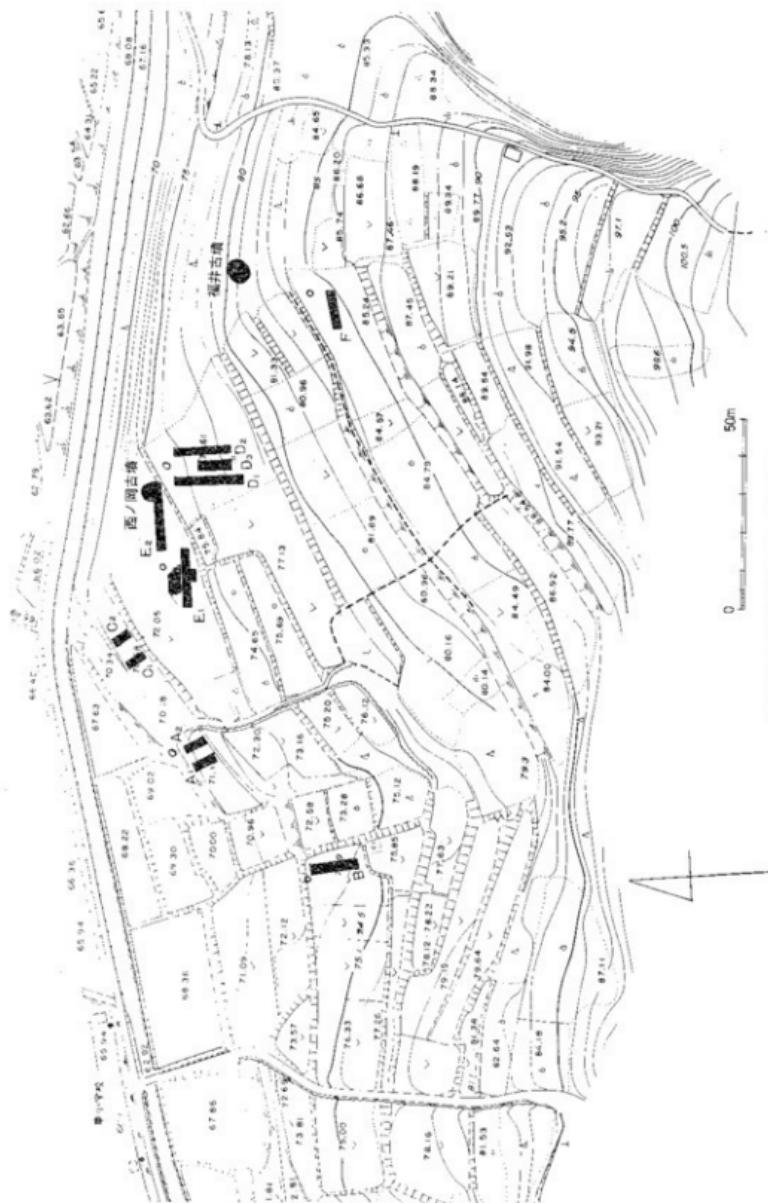
(G)西谷神社 (H)大江神社

注-1 ○は遺跡を示し。●は神社を示す。

注-2 國土地理院発行 1:50,000地形図「鳥取南部」「若狭」四幅より抜粋。

第2図 船岡町遺跡・神社分布図

第3図 西ノ岡遺跡トレンチ分布図



第Ⅱ章 調査の概要

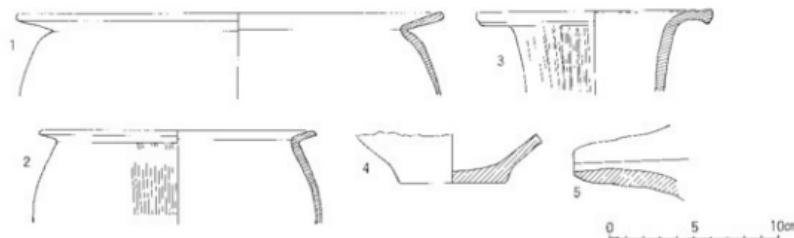
船岡町大字福井字西ノ岡地内で第2回遺跡分布図に見るように福井古墳（現状はヒノ木の25年生におおわれているが墳形は円墳か方墳で墳丘崖下（北方）に舟川一昔高瀬舟が通った枝川一が流れている。規模は直径12m・高さ1.5mである。）が認められており、また付近に上師器片が散布している為に何らかの遺跡の存在が推定されていた。そこで、この遺跡の性格・規模等を明確にするための試掘調査を実施した。

(II-1) A₁・A₂ トレンチ

A₁：トレンチ表土下40～55cmで弥生土器底部（三片）、甕（2片）、注口土器の注口部（1個）、壺（1片）その他を検出しているが、遺構としては方形状の落ち込みを第4回の如くに感ずるのみで明確には認める事が出来なかった。

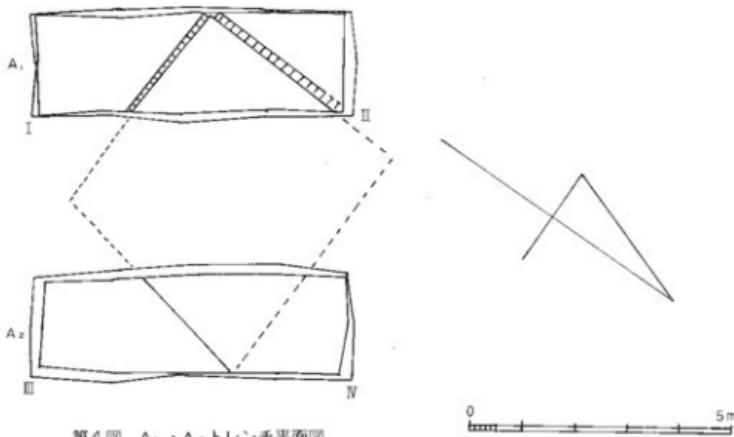
従ってA₁・A₂トレンチでは、その出土状況より弥生時代後期頃の文化層が地表下40～55cmのところにあると推定される。又、その他の遺物として、奈良時代から平安時代を指示する須恵器片（高台）を表土層より認めている。

遺物実測図-I

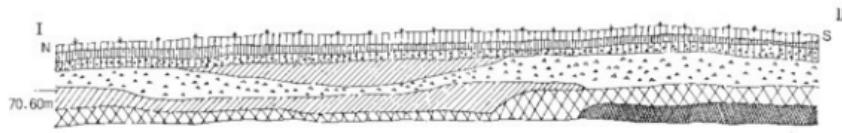


A₁・A₂ トレンチ出土物一覧表

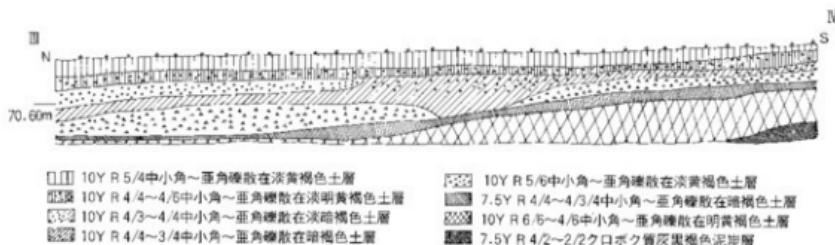
遺物番号	器種	色調	胎土	焼成法	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
1 甕	浅黄	粗砂点在 細砂散在	やや 軟質	11 種 25.2	鋸い「く」の字の口頭部 口縁端部や肥厚	不明	A ₁ トレンチ -40cm
2 甕	にせい橙	均質細粒	やや 軟質	口 種 16.0	鋸い「く」の字の口頭部 均等厚の口縁部	削上部から頭部にタテ ハケメ	A ₁ トレンチ -40cm
3 長颈甕	にせい 黄褐	均質細粒 ～微粒	やや 硬質	11 種 14.0	直立気味外縁頭部 大きく開き垂下気味の 口縁端部	外面頭部タテハケ 内外面口縁部ヨコナデ	A ₁ トレンチ -48cm
4 弥生土器 底面部	浅灰	均質細粒 粗砂点在	やや 軟質	6.2	一端立ち上がって広がる	不明確	A ₁ トレンチ -65cm
5 弥生土器 注口部	にせい橙	均質細粒 粗砂点在	やや 硬質	口 種 1.5 注口長 5.8	外縁端部を丸くおさえ る。	ヘラオサエ？	A ₂ トレンチ -80cm



第4図 A₁・A₂トレンチ平面図



第5図 A₁トレンチ東壁地層断面図



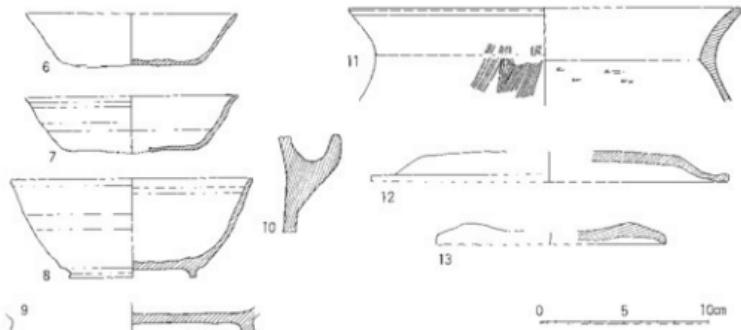
第6図 A₂トレンチ東壁地層断面図

(II-2) Bトレレンチ

本トレレンチ全体では17個のピット状遺構と1基の土壙(南西部より供獻土器と考えられる土師質上器片を認めており)、そして北端部で溝状遺構を検出している。この内、遺物を伴出したピットはNo.5・9・14ヶ所であり、灰白色を呈した高台のある环や壺の耳を検出した。また北端部の溝状遺構からは須恵製・土師製の小片を認めたが計測に値するものは認められなかった。

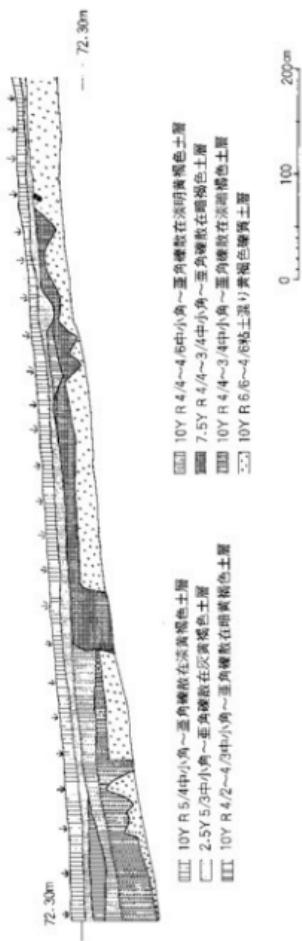
ピット状遺構の配列状況より、N 20°Eの傾きをもつ建造物が推定され、出土物より八世紀(奈良時代)頃の掘立柱式の建物であり、この北端部には自然地形を切り込んで深さ20cmの溝を設けていたものと考えられる。

遺物実測図一Ⅱ

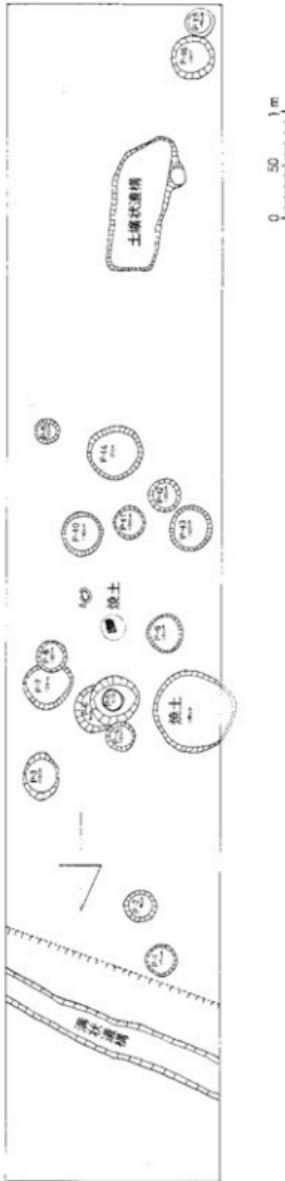


Bトレレンチ出土物一覧表

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(g)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
6	环	灰	白	粗砂点在 硬質	12.2	口 径 やや上げ底気味 端面を丸くつまみあげる	マキアゲ 内外面ヨコナデ	Bトレレンチ ピット 9 —50cm
7	环	灰	白	中砂点在 硬質	12.6	11縁上部外反気味	マキアゲ 内外面ヨコナデ	Bトレレンチ ピット 5 —55cm
8	环	灰	白	粗~中砂 敷 在	13.4	端面平坦な高台 (短くくびれ)	マキアゲ 内外面ヨコナデ	Bトレレンチ 焼上雨四方 30cm
9	环	灰	白	中砂敷在 硬質	14.3	ヨコナデによりやや丸味のある高台底	内面底部ヨコナデ 外面底部へラケズリ	Bトレレンチ —35cm
10	壺の耳	灰	青	中砂敷在 織 密	4.5		貼付ユビオサエ	Bトレレンチ ピット 14 —55cm
11	壺	明黄	褐	粗~中砂 敷 在	23.3	「く」の字に外反する 口部 「U」底部	外面部上半~肩部タ チハケ 内面肩上ヨコヘラケ ズリ	Bトレレンチ ピット 14 —55cm
12	蓋	青	灰	中砂点在 織 密	21.2	11縁端部内面に~条の 凹面。厚めの舟井部	内外面ヨコナデ (クロコ使用)	Bトレレンチ ピット 14
13	蓋	青	灰	中砂点在 織 密	13.6	やや凹面の舟井部	内外面ヘラケズリ・ヨ コナデ(西軒台使用)	Bトレレンチ ピット 14



第7図 西ノ岡遺跡已トレンチ東壁地層断面



第8図 Bトレンチ平面実測図

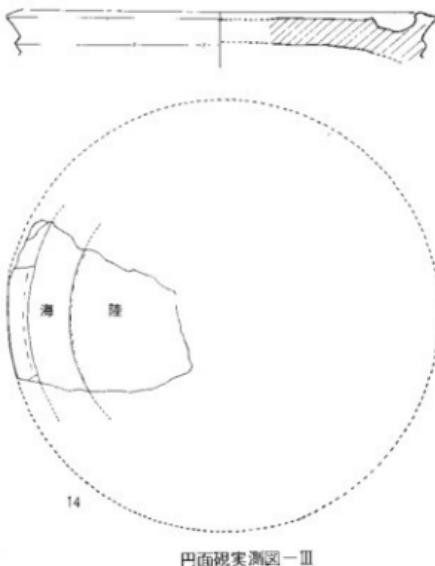
(II - 3) C₁・C₂ トレンチ

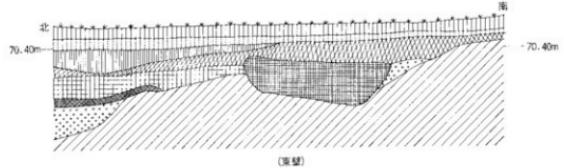
2×5mのトレンチを二本設定したが、北半部が急激に落ちる遷急地点に当たり、この落込みが人為的なものなのか自然地形なのか判断できない。しかし、その埋積状況により奈良時代以前には形成されていた落込みと考えられる。つまり地表下50cmで中世上鍋の破片を検出し、-80~120cmより中世の壺・甕（計測不能）の須恵製破片を検出している。従って図-11の地層断面からも判るように奈良時代から室町時代にかけて間歇的に埋積されていったものと考えられる。

また、C₂ トレンチ-120cmより円面硯14を検出した。この円面硯は、硯面の16~20%を残欠するのみで台脚部を欠損しているが、口径15.4cmで径11.0cmの磨滑された陸を復元実測できる。陸の周間に深さ9.5mm、幅14.5mmの海がめぐり、陸と海の境界は高さ0.5mmの綾線により明瞭に分けられる。そしてヨコナデによる弱い二条の凹線を上面にもち、幅7.5mmの外縁が海を囲み、側面には突帯が施され、その直下の台脚部上端には透しを穿つ際に形成された幅2.5cmに二ヶ所のヘラ痕を認め方形状の窓が穿たれていたものと判断される。

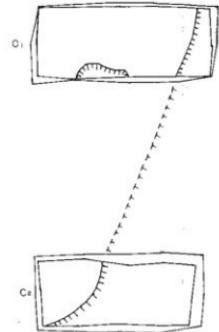
色調は表面が青灰色、断面に厚さ2.0mmの淡赤褐色の部分がサンドウィッチ状に見られ、胎土は中砂が点在するが全体として緻密で硬質である。手法としては、内面はヨコナデ、外画はヘラケズリ後ヨコナデである。以上により焼成が完壁とは言えないまでも堅く焼きしまった作で、奈良時代盛期から後半期に推定して大過ないものと考える。

そして、この円面硯の出土状況より
C₂ トレンチ南方（山寄り）に奈良時代のこの付近の主要建造物があったものと推定され、マサ土を搬出する土石流によりこの円面硯の破片がC₂ トレンチ北部の落込みへ埋没したものと考えられる。

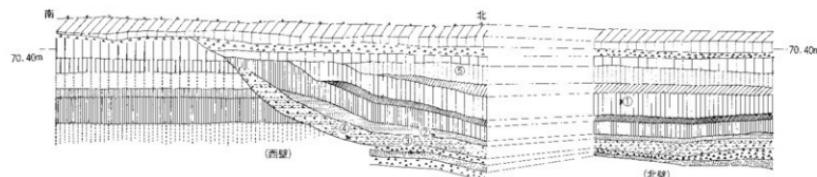




第10図 西ノ岡遺跡C・トレンチ東壁地層断面図



第9図 C1・C2トレンチ平面図



第11図 西ノ岡遺跡C2トレンチ西壁・北壁地層断面図

- ① 銚器片 (外面 ハケメ、内面 タキ、厚さ 6~9mm) 6~7世紀
 ② 須恵器片 (内・外側 ヨコナデ) 7~8世紀
 ③ 壁口縫部・須恵器片 (内・外側 ヨコナデ) 7~8世紀
 ④ 円瓶底・須恵器製 5世紀
 ⑤ 中世土鍋 家町時代?

0 50 1m

(II-4) D₁・D₂・D₃ トレンチ

最初D₁・D₂ トレンチ(各2×15m)を設定したところ、D₂ トレンチでは出土量が少ないのでに対して、D₁ トレンチではその南半部—30cm付近より古式土師器片が中小亞角疊一角疊淡黑褐色土層に混入して、一H平均約30片が出土した。

遺物が疊質土層より出土する為、土器片と疊との判別が取り上げる乞困難であり遺構の確認が出来ないままに漸深作業を行なった。その結果、地表下90~110cmで口縁部にクシガキ沈線を施した壺・甕類の破片を検出し、—110cm前後でピット状遺構を検出すると同時に、第13図に見る様に略南北方向に置かれた7本の木炭と焼土を認めるに至った。

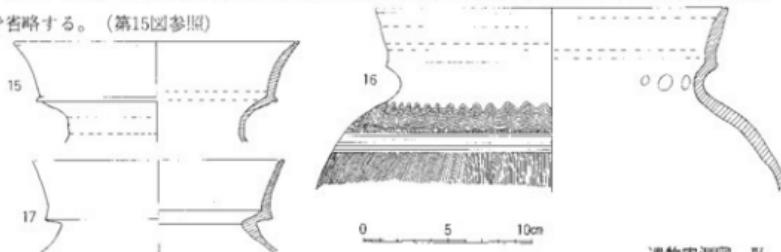
従って、D₁ トレンチの一90~110cm前後に見られる土層は擾乱されていないと判断され、これに伴なう遺物として42・55・56を挙げる事ができる。42番の土器は一覧表では丸底型土器に分類しているが、正確には丸底気味土器と呼ぶべきもので底面にわずかな平凹面を有する土器である。55番は比較的筒部の短かい鼓形器台であり、住居址の入口が南面していると仮定するならば、この位置には祭祀的な気配を感じる。そしてこの時期の日常的器台が56番で代表されるのではなかろうか。又、低脚壺に分類してはいるものの52・53・54番の土器は器台としての用途を十分に有するものであり、—90~110cmに見られる遺構面とどの様な関係を有するのか問題となる。

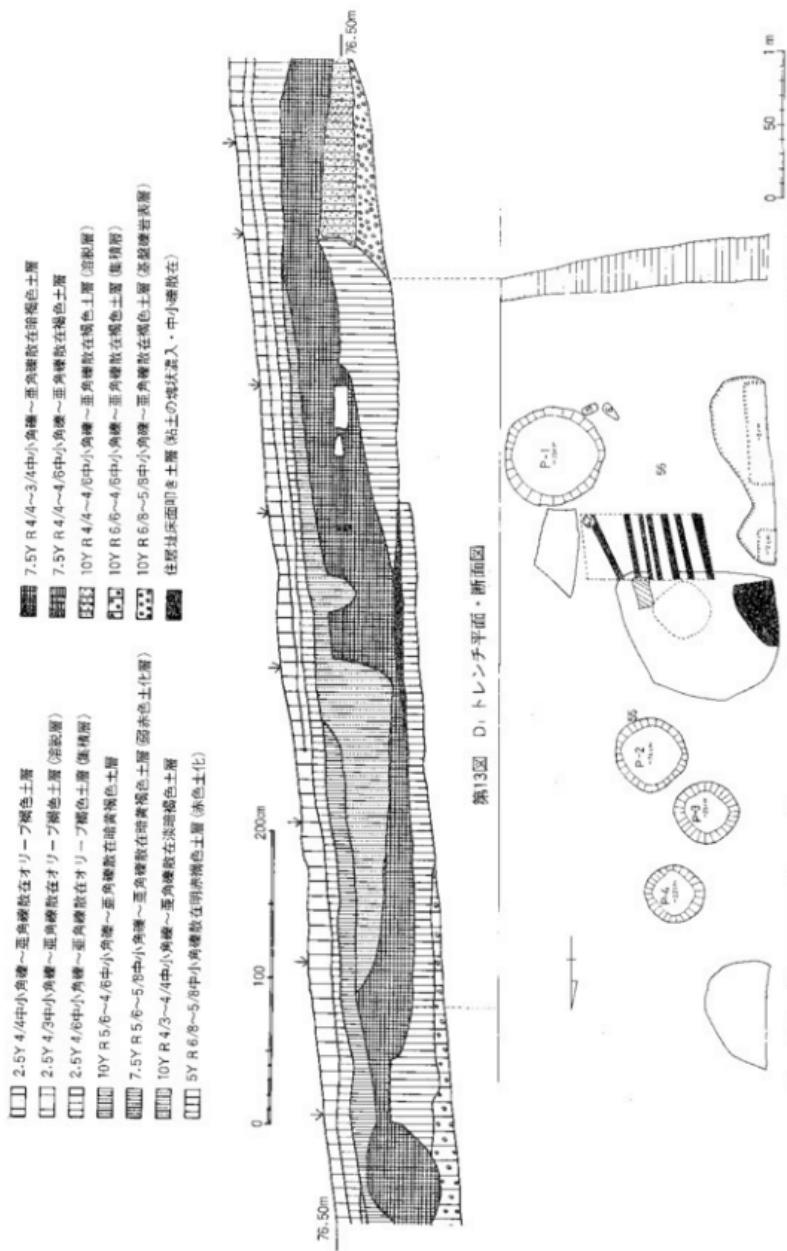
そこで、D₁ トレンチ南部での遺物の出土状況を層位的に見るならば、—90~110cm前後を弥生時代後期から末期と判断し、—40~50cmに一つの文化層を認め、この層準より古式土師器が相対的多量に出土すると判断できる。しかし全体として見るならば—80cmより浅いところは古墳時代前期以後に擾乱されている可能性を有する事になり、—40~50cmの層位が四~五世紀を代表する層位である事を断定するのは早計であると言わざるを得ない。

ともあれ、D₁ トレンチ南部—90~110cmで検出した住居址の規模を確認する為D₃ トレンチを設定したが、不明確ではあるが方形プランと推定出来る程度で全体を把握するには至らなかった。

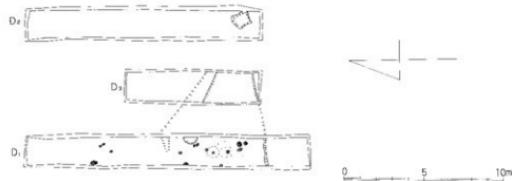
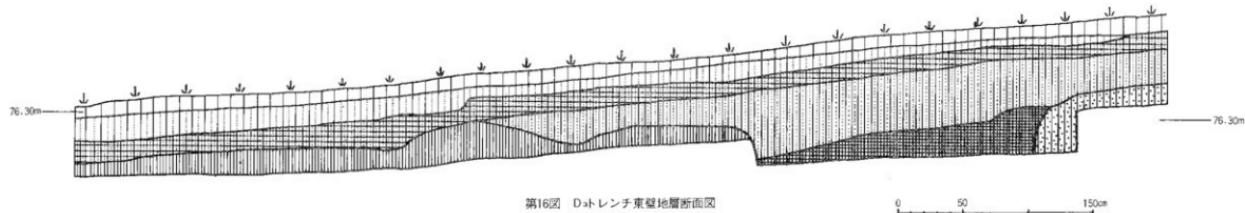
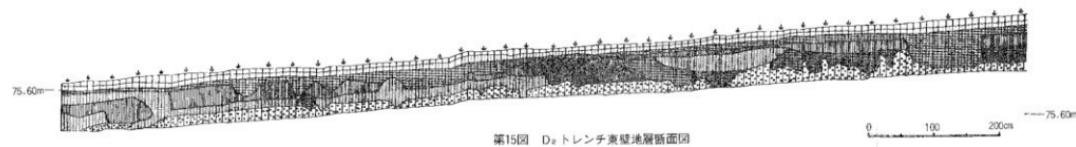
以上により、D₁ トレンチ南部—90~110cmに見られる住居址は排水溝を有する堅穴式住居で方形プランと推定され、これを弥生時代後期から古墳時代前期の上器片が疊層と共に被覆しているものと考えられる。

D₃ トレンチでは南端部で木棺墓の遺構を認めたが、伴出遺物はなく層相的に新期のものなので省略する。(第15図参照)

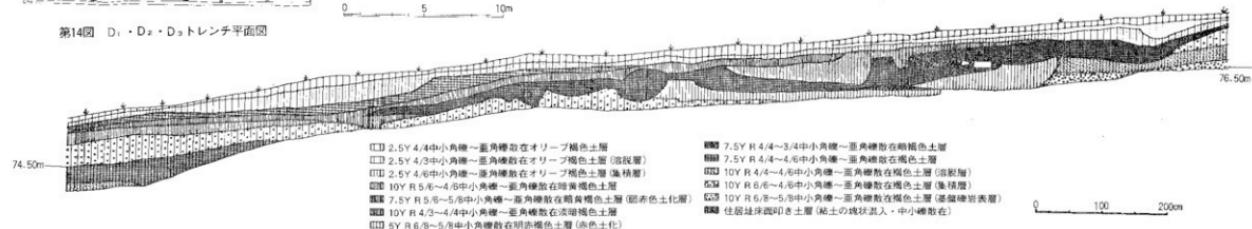




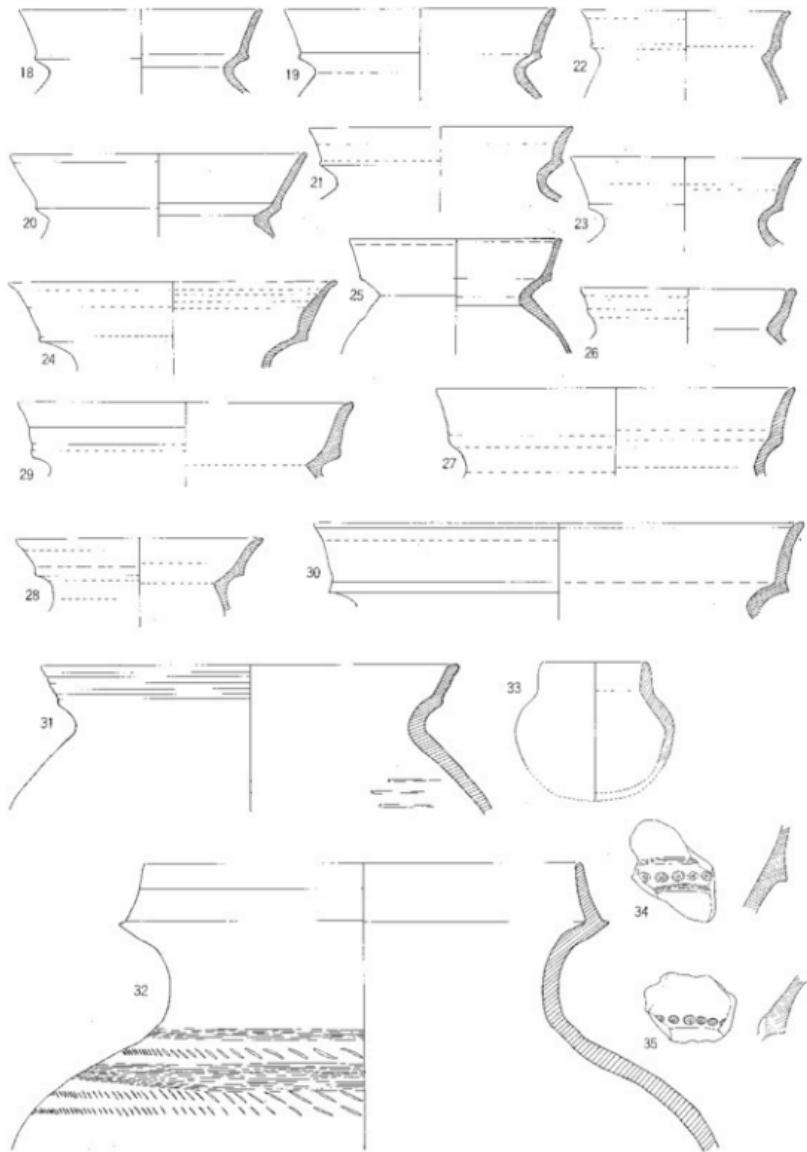
第13図 D、トレンチ平面・断面図



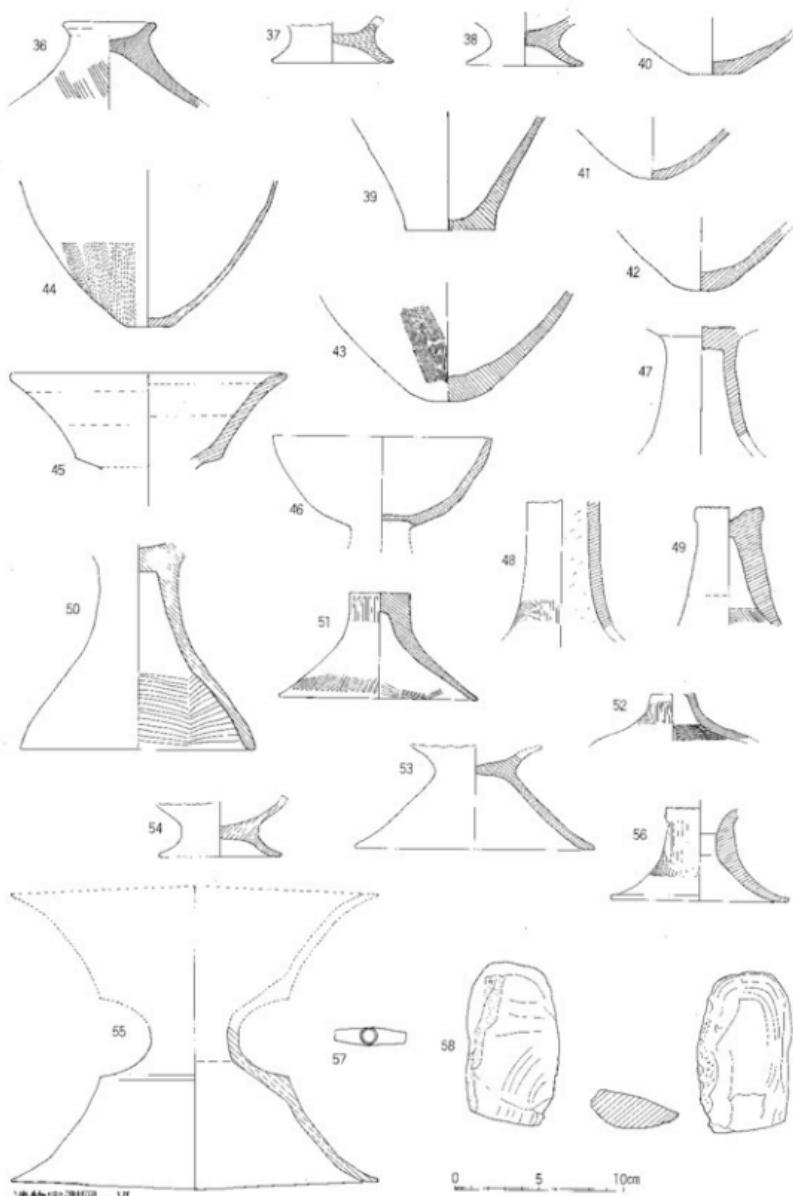
第14図 D₁・D_z・D₃ トレンチ平面図



第17図 D₁ トレンチ東壁地層断面図



遺物実測図-V



遺物実測図—VI

Dトレンチ出土物一覧表

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成	法量(kg)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
15	甕又壺	浅黄 染	中砂敷在 硬質	やや 硬質	11.5 17.0	直線状の頭部、口縁下部に接をもつ複合口縁	外腹ヨコナデ 内面口頭部ヨコナデ	D: トレンチ -60cm 外面上にスス沈着
16	甕又壺	黄 極	中砂敷在 緻密	やや 硬質	11.5 21.0	複合口縁。下部に接する複合口縁	口縁下に2条の凹面。 肩上部に12条よりなる波状文	D: トレンチ -85cm 外面上にスス沈着
17	甕又壺	浅黄 染	中砂敷在 軟質	やや 軟質	11.5 15.0	複合口縁。複外反口縁。 口縁下部に接をもつ。	外腹ヨコナデ 内面肩部へラグゼリ	D: トレンチ南部
18	甕又壺	にせい黄 褐	細砂敷在 均質	やや 軟質	11.5 14.4	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に接をもつ。	口縁下に2条の凹面。 外腹ヨコナデ。 内面口縁ヨコナデ	D: トレンチ南部
19	甕又壺	にせい黄 褐	中砂敷在 軟質	やや 軟質	11.5 16.0	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に接をもつ。	内外面ヨコナデ	D: トレンチ南部
20	甕又壺	浅黄	中砂点在 細砂敷在	やや 軟質	11.5 17.6	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に接をもつ。	口縁端部をややマミアゲル。 内外面ヨコナデ。	D: トレンチ南部
21	甕又壺	浅黄	中砂敷在	やや 軟質	11.5 15.6	複合口縁。複外反口縁部。 口縁下部に接をもつ。	内外面ヨコナデ 口縁端面を丸く仕上げる。	D: トレンチ -40cm
22	甕又壺	にせい黄 橙	粗砂敷在 (石英粒)	やや 軟質	11.5 12.4	複合口縁。複外反口縁部。 口縁下部に鋸い接をもつ。	内外面ヨコナデ	D: トレンチ -50cm
23	甕又壺	にせい黄 橙	中砂敷在 均質	やや 硬質	11.5 14.6	複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に鋸い接をもつ。	内外面ヨコナデ	D: トレンチ南部
24	甕又壺	にせい黄 橙	小砾点在 中砂敷在	やや 硬質	11.5 19.4	複合口縁。大きく外反する口縁部。 口縁下部に鋸い接をもつ。	内外面ヨコナデ	D: トレンチ -80cm 外面上にスス沈着
25	甕又壺	にせい黄 橙	口砂敷在 小砾点在	やや 軟質	11.5 13.6	鋸い複合口縁。複外反口縁部。 口縁下部に鋸い接をもつ。	内外面ヨコナデ 内面肩部へラグゼリ	D: トレンチ -60~80cm 外面上にスス沈着
26	甕又壺	浅黄 染	緻密	やや 硬質	11.5 12.8	厚めの口縁部 丸みのある口縁端面	内外面ヨコナデ	D: トレンチ南部
27	甕又壺	にせい黄 橙	小砾点在 中砂敷在	やや 軟質	11.5 21.2	鋸い複合口縁。外傾する口縁部。 口縁下部に鋸い接をもつ。	内外面ヨコナデ	D: トレンチ 外面部に赤色顔料残存
28	甕又壺	にせい黄 橙	小砾点在 粗砂敷在	やや 硬質	11.5 14.6	「く」の字に外反する口縁部。 口縁下部に鋸い接をもつ。	内外面ヨコナデ	D: トレンチ -80cm 外面上にスス沈着
29	甕又壺	にせい黄 橙	粗砂点在 緻密	やや 硬質	11.5 19.8	「く」の字の頭部 口縁部に2条の鋸い凹面	口縁下部ツマミ出し凸 唇をつくる	D: トレンチ -80cm 外面上にスス沈着
30	甕又壺	外面は黒 内面は淡 黄	中砂点在 均質	やや 硬質	11.5 29.0	複合口縁。口縁下部に 鋸い接をもつ。	口縁端部をややマミアゲル。 内外面ヨコナデ	D: トレンチ -75cm
31	甕又壺	にせい黄 橙	小砾点在 粗砂敷在	やや 硬質	11.5 24.8	「く」字に外反する口 頭部 口縁部に6条の沈線	外面ヨコナデ 内面口縁部薄らいヘラ ミガキ 内面肩部へラグゼリ	D: トレンチ南部 40~75cm

遺物番号	器種	色調	胎土	焼成法	法量(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
32	甕又壺	淡黄	均質細粒	やや 硬質	11 29.0	口縁部に複合口跡。内部する口縁部。口縁下部に鋸い 歯をもつ。	外面部ヨコハケ 内面部ヘラケズリ 内面部ヨコハケ	D: トレンチ南部 —60cm
33	小壺	黄	粗砂点在 織密	やや 軟質	11 6.2	直立気味の短い口縁部 厚めの口縁部	外面部ヨコハケ 内面部ヘラケズリ 内面部ヨコハケ	D: トレンチ中央部 —50~60cm
34	甕	棕	粗砂点在 織密	やや 軟質	不 明	越外反の口縁部 口縁下部に棱	内面部ヨコハケ 外面部スランプ文 イ本のクンガキ沈線	D: トレンチ —80cm
35	甕	浅黄	粗砂散在	やや 硬質	不 明	外反・口縁部 口縁下部に棱	内面部ヨコハケ 外面部ヨコナダ 二重スタンプ文 (沈線なし)	D: トレンチ
36	蓋	黄	粗砂散在	やや 軟質	つまり 程 5.6	外反して大きく開いた 縁部	外面部ヨコハケ、ヨコナダ 内面部ヨコナダ?	D: トレンチ —75cm 外面部に赤色顔料塗付
37	甕・甕の底	淡黄 棕	中砂散在	やや 硬質	底 程 7.2	不 明	外面部ヨコナダ 内面部ヘラケズリ	D: トレンチ南部 外面部赤色顔料塗付
38	壺・甕の底	淡黄 棕	粗砂点在 織密	硬質	底 程 6.9	不 明	外面部ヨコナダ 内面部指印	D: トレンチ
39	平底型 土器	外面 内面 に無い 黒褐	均質細粒 織密	硬質	底 程 5.2	端立上がり縁外反	外面部ナダ仕上げ?	D: トレンチ —40cm
40	平底型 土器	外面淡黄 内面淡黄	粗砂点在 中砂散在	やや 硬質	底 程 3.0	上げ底気味 緩やかに立上がる	外面部ナダ 内面部ヘラケズリ	D: トレンチ —30cm
41	丸底型 土器	外面 内面 に無い 黄	均質 織密	やや 硬質	底 程 1.3	丸底気味 緩やかに内凹立上がる	外面部ナダ 内面部黒色ヶ沈線	D: トレンチ 60cm
42	丸底型 土器	外面 棕 内面淡黄	粗砂散在	軟質	底 程 1.0	丸底気味 内凹立上がる	外面部ナダ 内面部ヘラケズリ 外面部スス沈線	D: トレンチ —100cm東面
43	丸底型 土器	外面 内面 に無い 黄	中砂散在	やや 硬質	底 程 2.0	丸底気味 内凹立上がる	外面部タテハケメ 内面部ヘラケズリ 外面部スス沈線	D: トレンチ —60cm北西部
44	丸底型 土器	外面 内面 に無い 黄	中砂散在 織密	やや 軟質	底 程 2.6	丸底気味薄い 内凹立上がる	外面部タテハケメ 内面部タテナダ	D: トレンチ —60cm
45	高环 环部	棕	粗砂点在 中砂散在	やや 軟質	11 16.4	大きく外反する口縁部 口縁下部に棱	不 明	D: トレンチ —90cm 外面部赤色顔料塗付
46	高环 环部	黄	粗砂点在 織密	やや 硬質	口 底 程 12.6	棱をもつ内凹側する 口縁部(脚付楕?)	外面部下部ヘラケズリ 上部ヨコナダ 内面部ヨコナダ	D: トレンチ
47	高环 脚部	棕	中砂点在 粗砂散在	やや 軟質	不 明	脚尖部が広い 長めの脚	内外面部タテナダ	D: トレンチ —80cm
48	高环 脚部	黄	中砂点在 粗砂散在	やや 軟質	不 明	脚尖部が広い 脚下部が聞く	外面部下部タテハケ 内面部ヨコ・ナナメカズ リ	

遺物 番号	器種	色調	胎土	焼成	法延[cm]	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地點)
49	高脚環 にぶい 黄	黒 粗	織密	やや 硬質	不 明	脚下部が大きく開く	外面不明 内面下半部ナメハケ	D: トレンチ南部
50	高脚環 黄	褐	粗砂散在	やや 硬質	脚端径 14.0	脚下部が縦内窓する	外面タテナデ 内面粗いヨコハケ	D: トレンチ -40cm 外画赤色顔料塗付
51	高脚環 黄	浅	中砂点在 織密	やや 硬質	脚端径 11.8	短かめの網 45°に開く脚端	外面タテヘラミガキ 内面ヨコハケ 後ヨコナデ	D: トレンチ -60cm
52	低脚環 黄	棕	中砂点在 織密	やや 軟質	不 明	短かい網 大きく開いた脚端	外面タテヘラミガキ 内面断続的ヨコハケ	D: トレンチ
53	低脚環 オリーブ 黄	小砂点在 中砂散在	やや 軟質	脚端径 14.2	小さな環部 45°に開く脚部	不 明 (内外ヨコナデ?)	D: トレンチ -65cm	
54	低脚環 淡明黄	均質	軟質 細砂散在	脚端径 7.2	短かく外反気味の脚部 内面気味立上がる部分	内面ヨコナデ	D: トレンチ -60cm	
55	鉢 器台	黄 棕	小砂点在 中砂散在	軟質	口 径 21.8	短かめの箇部 大きく外反する口縁部 口縁下部に接	外面ヨコナデ 内面ヘラケズリ 後ヨコナデ	D: トレンチ -90cm
56	器台	灰	中砂点在 織密	やや 硬質	口 径 10.6	短かめの網 45°外反の脚下部	外面タテヘラミガキ 内面ヘラケズリ 後ヨコナデ	D: トレンチ
57	土瓶	浅	黄	細砂点在 織密	長さ 4.25 口径 1.05	筋線形、全体的に薄め の上部	不 明	D: トレンチ排水
58	石斧	灰 オリーブ	玄武岩	長さ 9.5 幅 5.5				D: トレンチ南西部 -50cm

(II-5) E₁・E₂ トレンチ

E₁・E₂ トレンチを設定して、C₂ トレンチで検出した円面鏡に関連する遺構の検出を試みた。しかし両トレンチ共に約20cm前後で基盤岩（鳥取層群下部頸層）に達し、明瞭な遺構・遺物共に検出できなかった。

E₂ トレンチ清掃中、この北壁東端部に円磨された巨礫を認め、この巨礫の性格を確認する為に拡幅作業を行なった。その結果、奥壁に三都變成岩を使い、側壁その他に円磨した川原石（安山岩）を配した約2m四方の石組を検出した。

これを横穴式石室であると断定し、仮称、西ノ岡古墳とした。この古墳についての詳述は項を改めて行なう。

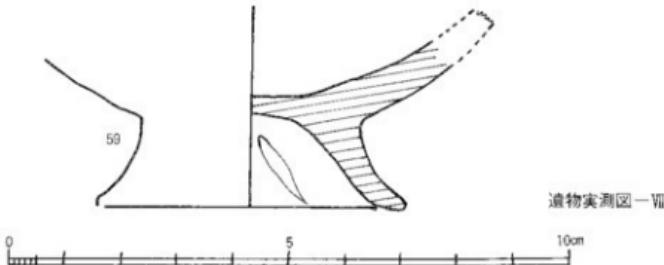
(II-6) F トレンチ

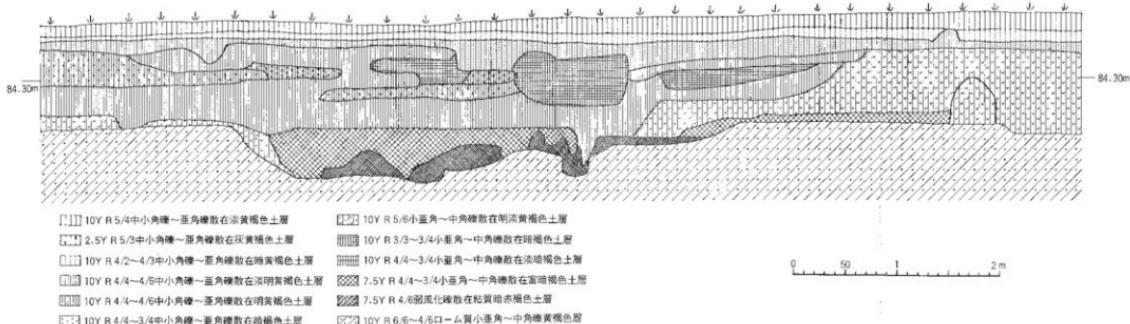
本トレンチ（2×10m）は、今回の試掘調査の中で最も高度のある所に位置しており、地形的に言えば扇状地の扇中央部に相当すると考えられる。しかし、この扇状地は沖積世に形成されたものなので、遺物・遺構の存在する可能性は十分にあり、逆に遺物・遺構が検出されなかつたとしてもそれを確認する事には価値がある。

本トレンチ西隅約50cmより洞部直径約25cmの土師器（甕？）とピット状遺構を認め、中央部で幅約3mの黒褐色の落込みを認めた。この黒褐色礫層中に土師器片の混入が見られ、地表下80cmではスタンプ文（厚さ2mm）の暗褐色を呈する土師片も確認した。この他に、トロ箱一杯分の上器片を検出したが、計測可能なものは見当らない。

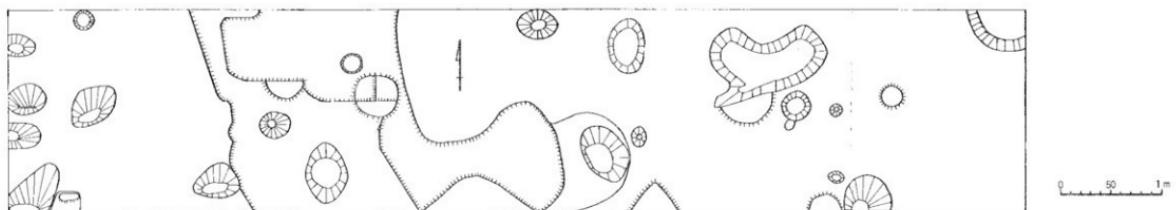
その中で59番の遺物によりF トレンチを代表させたい。この遺物は低脚環もしくは器台に分類されるもので、淡黄色を呈し、胎土には中粒砂が点在しやや軟質である。形態上の特徴として低く小さな脚部と緩やかに外反する底体部。手法上の特徴として外面ヨコナデ・脚内面不規則なヘラケズリを認める。この59番はF トレンチ中央部約80cmで検出されたが、時期的には弥生時代末期から古墳時代前期のものと推定され、D₁ トレンチの遺構被覆層と同時期のものと推定される。

この結果、明瞭に遺構を把握する事はできないが、隣接して存在する福井古墳とは直接的な関係をもたない、何らかの遺構がある事は確認でき、同時に西ノ岡遺跡の位置する沖積扇状地の扇中央部にも遺構が分布している可能性を指摘できる。

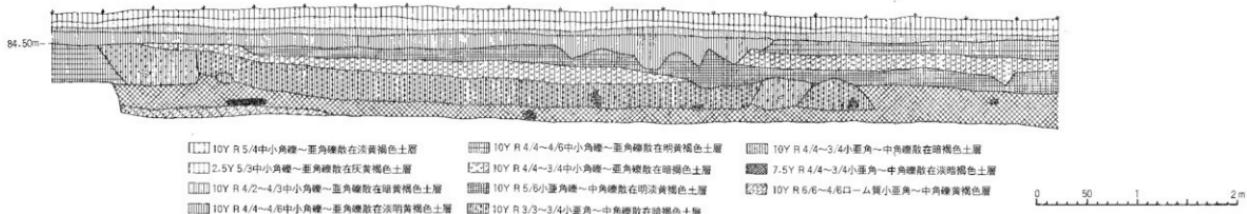




第18図 F トレンチ北壁地層断面図



第19図 F トレンチ平面図



第20図 F トレンチ南壁地層断面図

(II - 7) 西ノ岡古墳

西ノ岡古墳は沖積扇状地の扇端部に位置しているかに見えたが、E₁・E₂トレンチの所でも述べたように、地表下20cm前後で基盤岩の鳥取層群下部層に達してしまう。

E₂トレンチ東壁で土層断面を見ると、表土層は中粒構造をもつ $10\times10\times5\text{mm}$ の中小角礫を散在させる、色調 2.5Y % - 1% の黄褐色土層で層厚10cmを測る。その下位層は、層相は同質であるが層厚15cm、色調 7.5Y R % の明褐色土層へ漸移し、下位の層厚15cm、7.5Y R % の色調をもつ中小角礫・亜角礫点在暗褐色土層へと変化して行く。そして10Y R % - 5% の明黄褐色を呈する新第三系中新統の基盤礫岩に達する。

従って、西ノ岡古墳は下位の中位段丘（いわゆる3万年段丘）との比高約15mを有する丘陵の末端部・高度73.5m前後の所に位置している。そして、この古墳の南東約60m、高度81mには福井古墳があり、両古墳ともに北方に八束川の形成した平野を一望できる所に立地している。

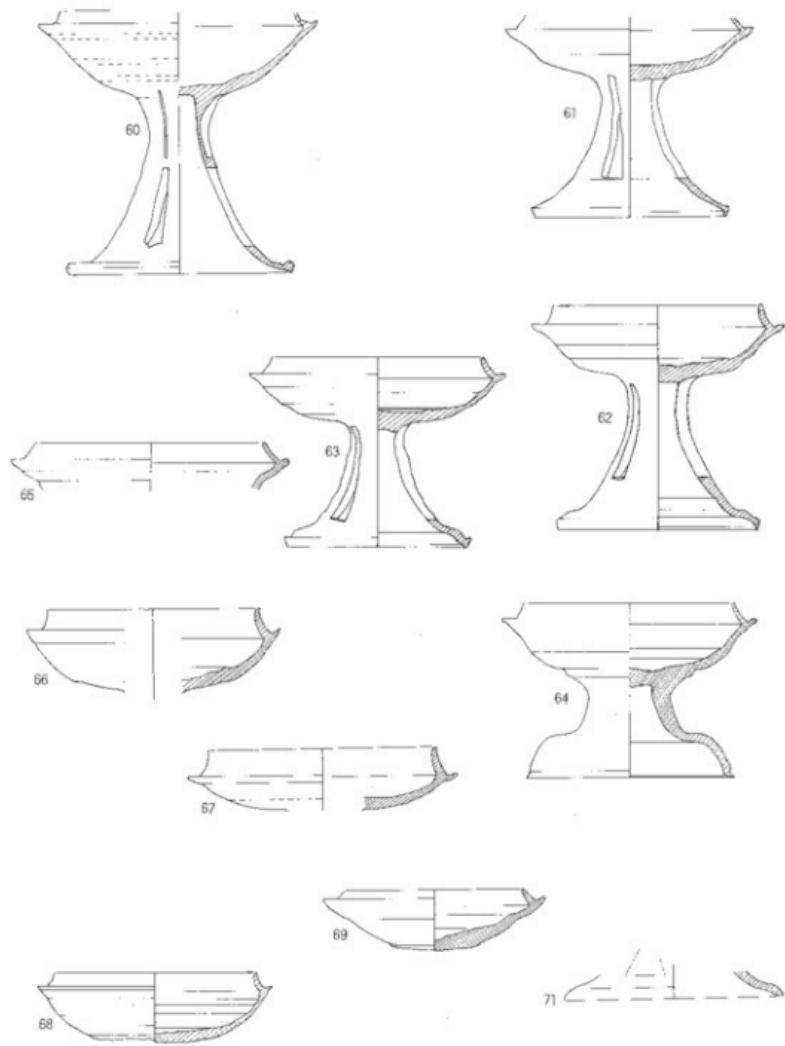
西ノ岡古墳の築造方法を推定すると、Dトレンチでの沖積層の層厚が約110cmである事とC・Dトレンチでの層相・土壤回行等を考慮すると、沖積層の層厚は西ノ岡古墳地点で約50cmと推定され、基盤礫岩を30~40cm掘り込んで築造したものと判断する。

この古墳は、両軸の横穴式石室で入口は閉塞され、玄室の高さは60cm以上（奥壁右隅の転落石を考慮）あったものと推定され、第21図から幅約190cm、長さ約200cmの玄室を実測出来る。

又、石室に使用している石は、奥壁のみに横幅168cm、厚さ約20cmの三郡変成岩の切削石を使い、奥壁幅に長さが足りなかった為か、この切削石の右側に $35\times38\times20\text{cm}$ の川原石（安山岩）を配して、この2個の石より奥壁が構成されている。右側壁は $97\times52\times32\text{cm}$ の石を最大とする計3個の川原石（安山岩）を配して側壁を構成し、この巨石の根石として安山岩の扁平な川原石を使用している。この巨石の上位には根石状の石は見られず、又巨石の間隙を埋める石も検出しないので断言する事はできないが、第1図に見る右側壁背後の巨石の痕跡は、側壁を二段に重ねたものと判断され残存している側壁の掘り方とは考えられない。左側壁も右側壁と同様の作り方と判断され、残存している石は $75\times36\times25\text{cm}$ の安山岩質川原石であるが、2ヶ所に巨石底面の根跡を認める。

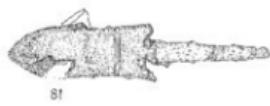
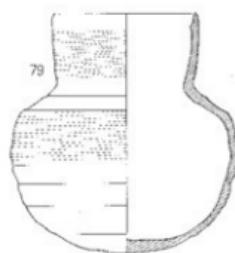
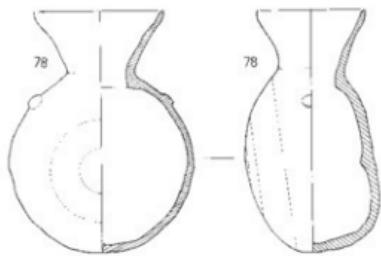
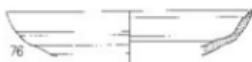
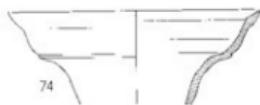
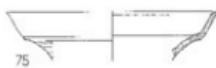
入り口付近の袖部を構成する石は、奥壁に対して直交する様に配置され、渓道部も含めて6個の巨石跡と考えられ、左袖の位置は外方の根石付近が妥当と判断する。出土物は破片等も含めて、高壙10・壙2・蓋2・甕2・壺1・提瓶1・直刀1・鉄鎌3・刀子2・鏡1を検出した。

これら出土物とその出土状況より古墳の造営時期を6世紀全搬から7世紀初頭と推定し、第1図（巻頭）に見る如く追葬の痕跡も認められる。伴出物を見ると、第21図8番で出土した高壙5個より大きく分けて二期を分類する。古い方から64番の短脚無透、63・62・61番の短脚・長脚三方一段透し、そして60番の長脚三方二段透の高壙である。この5個の高壙に加えて65番66・67番の高壙を考慮すると、11縁部と脚端部に決定的な相違が認められ、少なくとも3回の追葬がなされたものと考える。



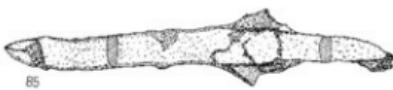
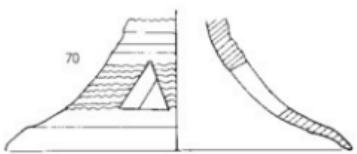
0 5 10cm

遺物実測図一四



0 5 10cm

遗物实测图一区



0 5 10cm

遺物実測図一X

西ノ岡古墳出土物一覧表

遺物 番号	器種	色 調	胎 土	焼成	法量(g)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
60	高环	褐 灰	粗砂点在 織 密	硬質 45g	11.3	二段階に立上がる 脚端部に3条の凹面	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑥-a
61	高环	青 灰	細砂散在 織 密	硬質 良好	13.9	縦内窓で立上がる 脚端部に後 脚端部に凹面	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑥-b J底部以下に赤色顔料
62	高环	暗青 灰	中砂点在 織 密	硬質 良好	11.3	内部気味で立上がる 脚端部に凸面と1条の 沈線	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑥-c J全体部以下に赤色顔料
63	高环	暗青 灰	中砂点在 織 密	硬質 良好	12.4	縦内窓で立上がる 脚端部に凸面と1条の 沈線	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑥-d J全体部以下に 赤色顔料
64	高环	暗青 灰	中砂点在 織 密	硬質 良好	11.3	短く太い脚上半部 脚下半部は大きく内側 し、端部に1条の凹面 端底面は平面	マキアゲ 内外面ヨコナデ	⑥-e
65	高环 环部	青 灰	細砂散在 織 密 不整	硬質 口 径	13.6	内傾気味で立上がる	マキアゲ? 内外面ヨコナデ	④、外面全体に赤色顔 料塗付
66	高环 环部	青 灰	中砂点在 織 密	硬質 良好	12.6	外反し立上がる 長い受部端面	マキアゲ、立上がりヨコ ナデ。 全体部ヘラケズリ、後 ヨコナデ。	③、④
67	高环 环部	淡青 灰	中砂点在 織 密	硬質 良好	11.3	外反気味立上がる	マキアゲ、立上がりヨ コナデ。 全体部ヘラケズリ 後ヨコナデ	⑤
68	环	暗青 灰	均 質 面	硬質 完全	12.0	2段階に立上がる 薄く長い受部	マキアゲ、内面ヨコナ デ。全体部・下部外面 ヘラケズリ。	準備部出土
69	环	淡青 灰	小砂点在 織 密	硬質 良好	10.6	短く内傾する立上 がり。 受部底面に凹面がない	マキアゲ、内面ヨコナ デ。全体部・下部外面 ハケメ調整	⑨
70	高环 脚部	暗青 灰	中砂散在 織 密	硬質 良好	11.3	脚端部内窓。三角形の 窓。脚中部に2条の凹 面	内外面ヨコナデ 脚中部に液状文	③
71	高环 脚部	外面青黒 内面青灰	中砂点在 織 密	硬質 完全	13.0	脚端部内窓 脚下部に三角形(?)の 窓	内外面ヨコナデ	⑩
72	环 蓋	青 灰	小砂点在 織 密	硬質 良好	11.3	口縫部に凹面	内外面ヨコナデ 口縫部を丸くおさえ る	⑪
73	环 蓋	青 灰	細砂散在 織 密	硬質 良好	12.1	口縫部に凹面	内外面ヨコナデ 口縫部を丸くおさえ る	⑫
74	應	青 灰	粗砂点在 織 密	硬質 良好	15.1	外反する口縫下部 口縫下部に1条の縫	内外面ヨコナデ 口縫部を指オサエ	⑬
75	應	暗赤 灰	均 質 面	硬質 良好	12.5	曲折し立上がる口縫部 内面口縫部と外側口 縫下部に1条の沈線	内外面ヨコナデ 外面脚部ヨコハケ 外面口縫上部ヨコナデ	⑭
76	高环?	紫 青 灰	粗砂散在 織 密	硬質 良好	14.6	1.5脚端部をフミアげ て内面を薄くする	内面ヨコナデ 外面全体ヨコハケ	⑮ 外面に自然釉付裏

遺物番号	器種	色調	施土	焼成	法基(m)	形態上の特徴	手法上の特徴	備考(出土地点)
77	不明	暗青灰	中砂点在 織密	硬質 良好	口 強 13.8	内面口縁端部に凸線 薄めの口縁端部	内外面ヨコナデ	②
78	握板	暗青灰	粗砂散在	硬質 良好	口 強 7.7	肩部にボタン状の耳を 貼付。 体部側面に貼合せの為 の凹面残す	体部マキアゲ、ハケメ 口縁部内外面ヨコナデ	⑤-1
79	帯又瓶	緑オリーブ灰	小櫻点在	硬質 良好	口 強 8.6	直立内縮 瓶底の口頭部 口縁端部前面に段差あり	内面ヨコナデ、マキア ゲ。 胴上半部以上外面にヨ コハケ。 胴下半部以下外面ヘツ ケズリ	⑤

(石器)

8 0 : 直刀 (出土地点⑦)

全長 35.2cm 刃長 25.0 基長 10.2 先幅 2.5 先幅 1.6 先重ね 0.9 先重ね 0.5 手裏一なし 岩反り一なし
目割孔径 0.3 口前長 2.3

強烈な横筋のX線写真により実測値を記したが、直刀が平造で角桿、両区の直刀と判断出来るが、強X線写真よりハバコ棒の痕跡があり、宝物的なものでなくして、生前に使川されたものと考えられる。

8 1 : 鉄鏡 (出土地点⑨)

直基二翼 (逆刺) 旗形で、現存長 15.5cm (含茎 7.3cm)。身幅 2.9 身厚 0.3を測る
鏡身の断面は扁平な梢円形をなし、茎部分は長方形の断面をなす。

8 2 : 鉄鏡 (出土地点⑩)

有茎鏡で現存長 9.5cm 鏡身 5.8 基長 3.7 身幅 2.1 身厚 0.2を測る
鏡身断面は扁平な梢円形、茎は扁平な長方形をなし、樹皮状のものが覆っているが、茎端部断面は梢円形となる。

8 3 : 鉄鏡 (出土地点⑪)

有茎鏡で現存長 10.4cm 鏡身 5.5 基長 4.9 身幅 2.2 身厚 0.2を測る
鏡身断面は扁平な梢円形、茎は扁平な長方形をなし樹皮状のものが覆っている。基端部断面は梢円形となる。

8 4 : 刀子 (出土地点⑫)

現在長 11.8cm 刃長 7.3 基長 4.5 身幅 1.1 身厚 0.6 反り一なし、基反り一なしで平造 (刃面が二等辺三角形)

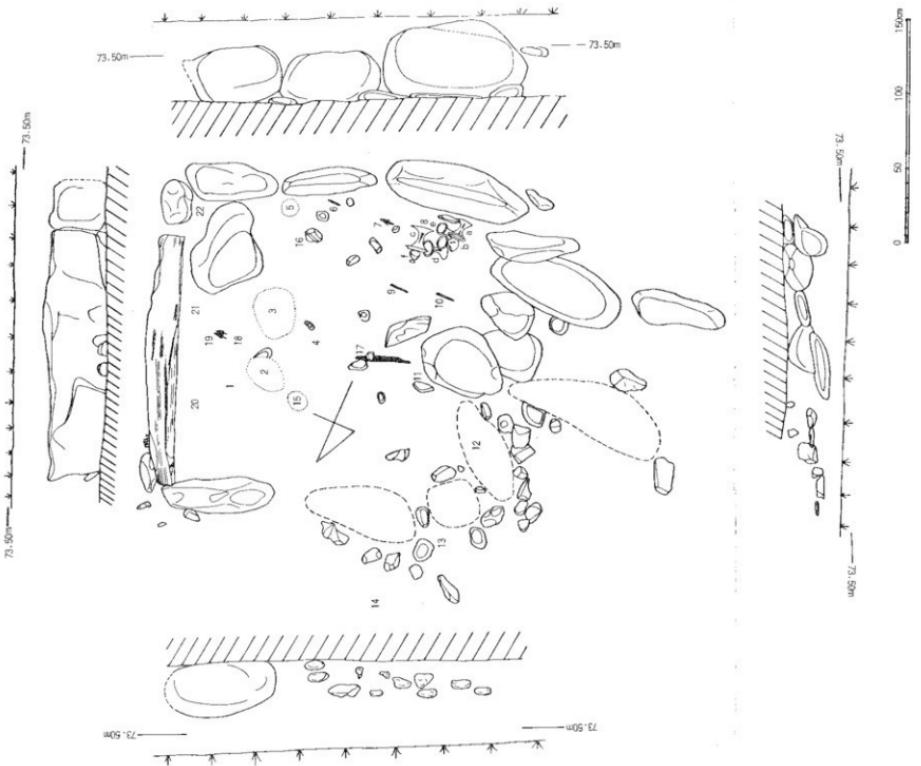
8 5 : 刀子 (出土地点⑬)

現存長 14.9cm 刃長 10.0 基長 4.9 身幅 1.05 身厚 0.05 反り一なし、基反り一なし、平造。

8 6 : 銚 (出土地点⑭)

現存長 14.5cm 刃長 7.7 基長 6.8 身幅 1.8 身厚 0.5
刃部中央部より曲折している。刃部断面長梢円、茎部断面長方形

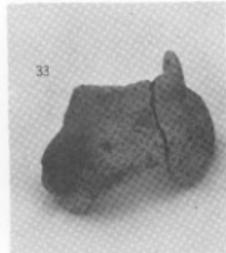
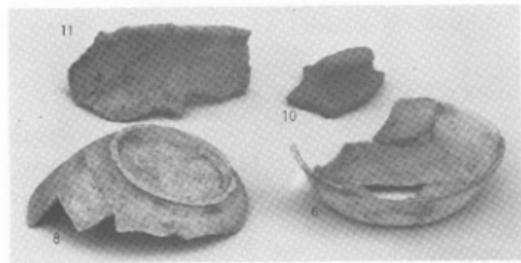
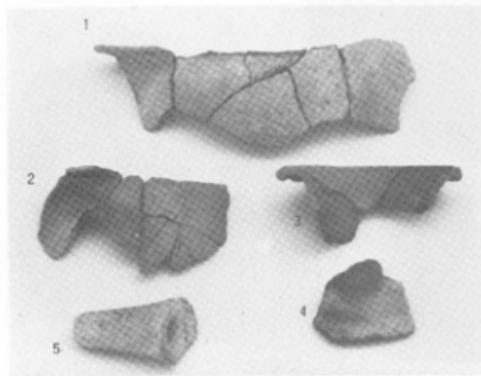
第21図 西ノ岡古墳石室構造図及び出土物出土地図

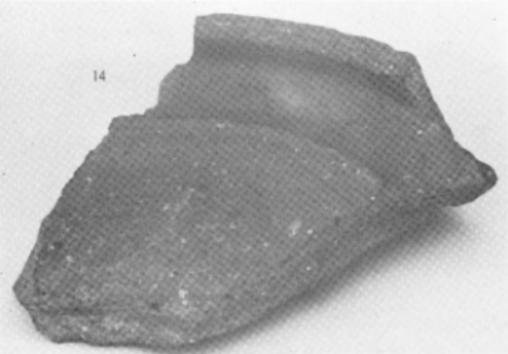


(注) 古墳内には砾石が在るが、遺物を取上げる場所ではわざわざいなくて手裏剣の内で記入漏れとなつてゐる。
参考図第1図を参照されたい。又、高尾石碑にある巨石は上部より削したものと推定して第1図には記入しない。

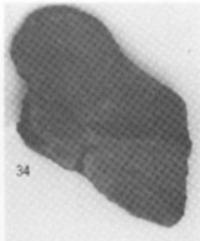


西ノ岡遺跡遠景

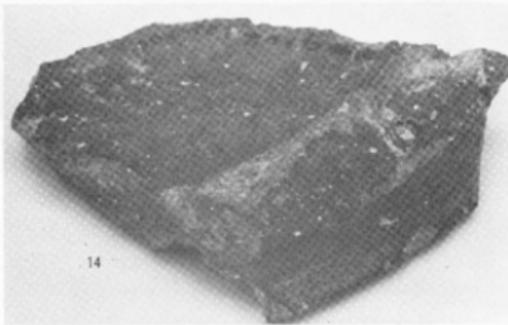




14



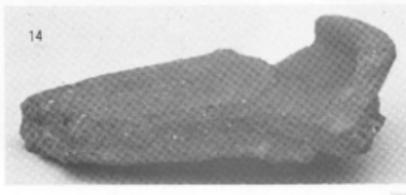
34



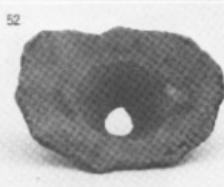
14



52



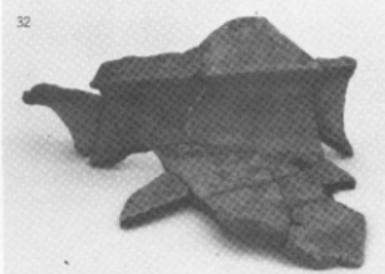
14



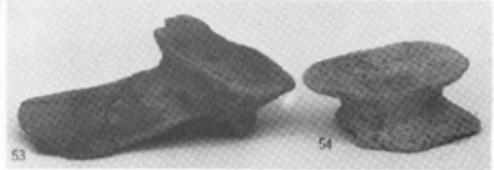
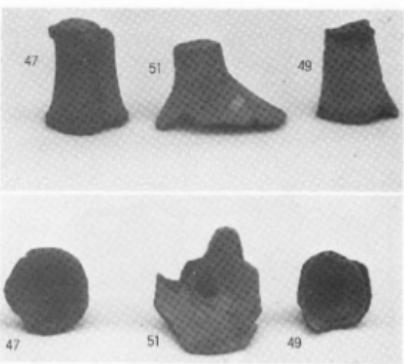
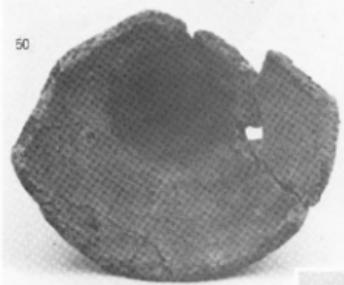
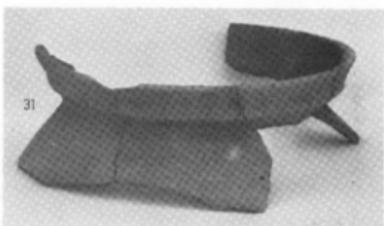
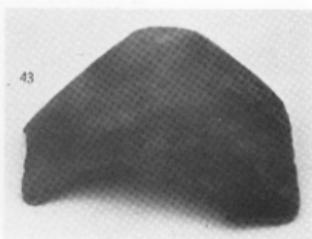
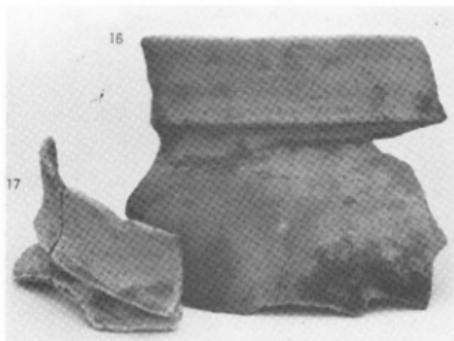
52

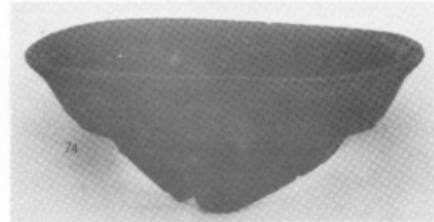
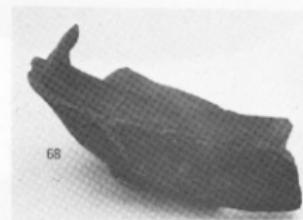
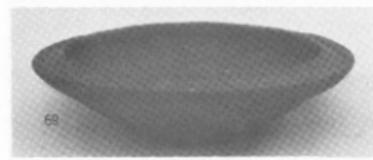
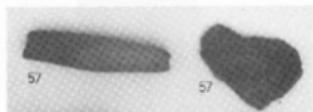
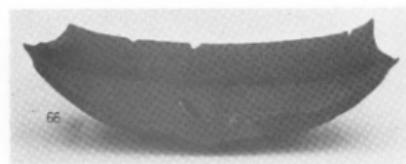
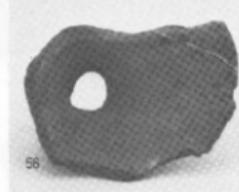
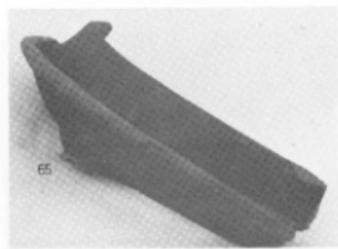
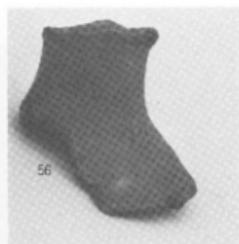
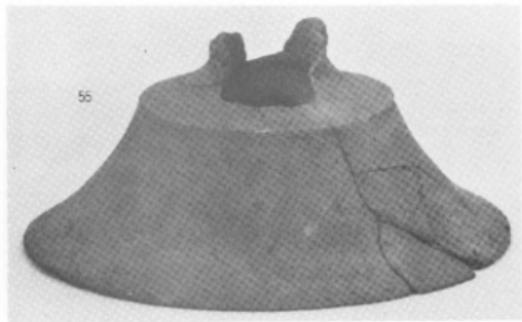


25



32







60



61



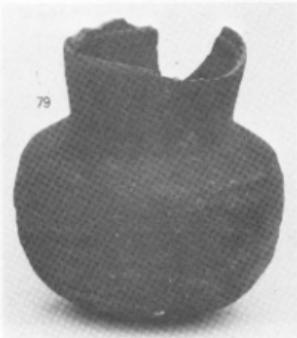
62



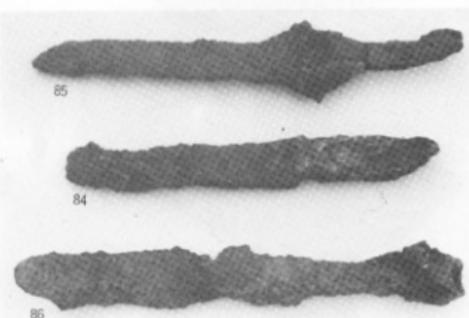
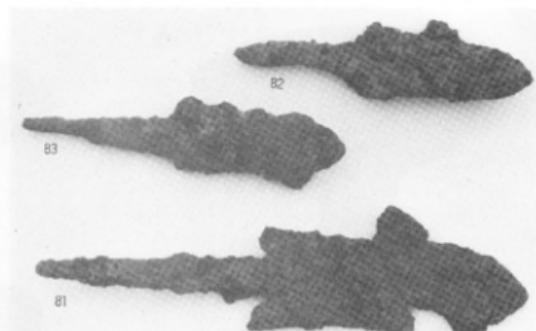
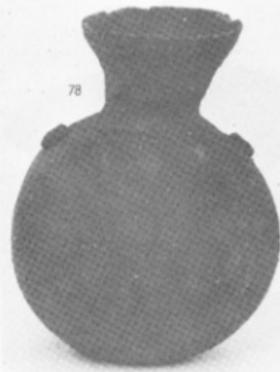
63



64

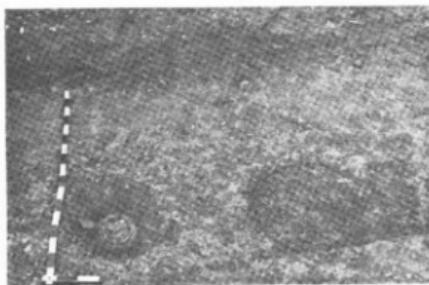


79

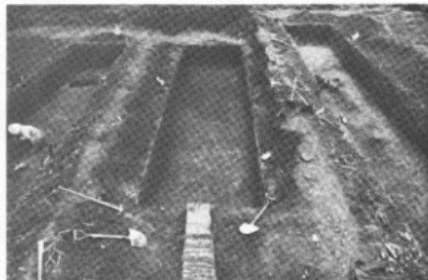


西ノ岡古墳玄室内17番より出土の直刀（強弱二種のX線撮影による）





B トレンチ遺物出土状況（西方より）



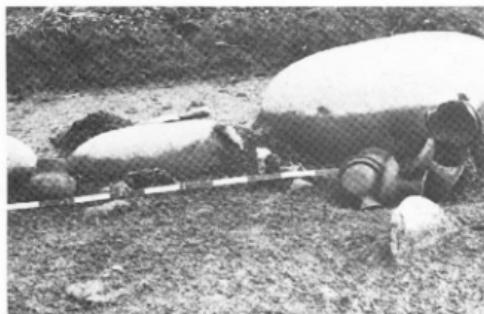
D₂ トレンチ（左側）
D₃ トレンチ（中央）
D₄ トレンチ（右側）
(北方より)



D₂ トレンチ南隅木棺墓（西方より）



木炭・丸底気味土器
(弥生末期住居址)
(D₁ トレンチ南半付近を
東方より見る)



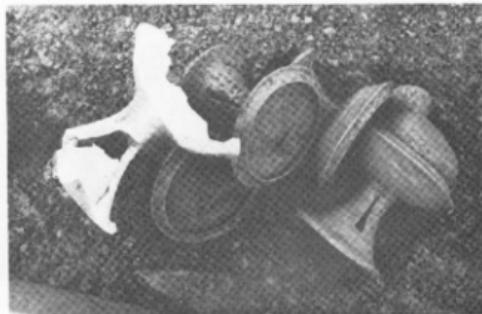
西ノ岡古墳右側壁遺物出土状況
(北方より)



西ノ岡古墳奥壁付近
鉄鏃出土状況



Fトレンチ遺物出土状況
(西方より)



西ノ岡古墳右側壁高基出土状況
(真上より)

あとがき

西ノ岡遺跡は、鳥取層群下部層を基盤とする沖積扇状地(風成の大山降下火山灰は見られない)にあり、北方に広がる中位段丘、低段丘の八束川河岸段丘面上には奈良時代の条里遺構の存在する可能性が指摘されている。

この遺跡で検出した遺構は、Bトレンチで奈良時代の掘立柱穴跡、D₁トレンチで弥生時代後期から末期の竪穴式住居址(1基)、E₂トレンチ東方より両袖と推定される横穴式石室を1基(開溝は確認できなかったが、D₁トレンチ北端部が急激に落込む事から何らかの排水施設が存在する可能性を有する)を検出し仮称、西ノ岡古墳とした。この古墳では追葬の塙跡を認め、築造時期を6世紀前半、造営時期を6世紀全般から7世紀初頭と推定した。

また、A₁・A₂トレンチでは不明確ながら方形の住居址状遺構を認め、Fトレンチにより扇央付近にも遺構の存在する可能性を確認し、これにより西ノ岡遺跡の位置する扇状地全域に渡って弥生後期から古墳時代前期の住居址の存在する可能性が指摘できる。

そして、C₂トレンチより円面鏡の破片を検出し、これによりC₂トレンチ南方の山寄りに奈良時代後半期のこの付近の主要な建造物の存在する可能性を指摘できる。

以上より、西ノ岡遺跡は弥生時代後期から古墳時代前期には住居区として使用され、古墳時代後期には古墳が造営され、奈良時代後半期から室町時代にかけて再度住居区として使用された可能性を有する遺跡であると推定する。

最後に、西ノ岡古墳より出土した直刀の原寸でのX線撮影を快く引受けた松下理一(鳥取赤十字病院歯科医)先生に記して感謝致します。

註① 都家町教育委員会(1979)：土師百井廐寺跡発掘調査報告書】

註② 岩永 実(1959)：鳥取県における条里地域の研究(第Ⅰ報) 鳥大学芸学部研究報告 vol.13P.257~276

註③ 鶴岡町教育委員会(1980)：牧野遺跡発掘調査報告書



Dトレンチにて作業員一同記念撮影

鳥取県八頭郡船岡町
西ノ岡遺跡発掘調査報告書

昭和56年3月20日

発行・鳥取県八頭郡船岡町船岡539
編集・船岡町教育委員会
印刷・鳥取県鳥取市相生町2丁目413
巧 印 刷